

## 文語の苑 第五回シンポジウム

高田 友

(第五回の概要)

なし。我が「文語の苑」の功績に過大なる讃辭

平成二十三年より此方、立冬を過ぐる頃ほひに、東洋  
大學白山キャンパスにて、「文語の苑シンポジウム」の  
開催せらるる、恆例の行事とぞなりたりける。

昨年（平成二十七年）また十一月二十二日（祭日前日  
の日曜日）、第五回シンポジウム舉行せられ、二時間  
餘の熱辯を経て成功裏に幕を閉づるに至る。生憎の  
曇天なりしかども、五十名を越ゆる聴講の方々を迎へ、  
盛況と言はずんばあるべからず。

を下されたるのみならず、自今本朝文化の發展に寄與  
せんことを期待せらるる旨仰せあり。會員一同、  
何爲奮ひ立ち、御意に副はずして己むべしや。  
さらに、同大学文學部・中山尙夫教授、「十返舎一九」  
と題する講演を行ひ給ふ。  
シンポジウムの進行狀況、左の如し。

仲紀久郎理事および車尾薫氏の共同司會の采配洵に

開會挨拶

東洋大學學長 竹村牧男

見事に、會合の次第滞りなく拂りて時の経過を忘る

十返舎一九について

東洋大學教授 中山尙夫

るばかりなり。  
冒頭、東洋大學竹村牧男學長より御挨拶を賜はる。例  
年の儀とはいふ條、その御厚情の程は感涙に咽ぶの外

朗讀 奥の細道

朗讀家

熊澤南水

紀行文の歴史・系譜

「文語の苑」主任研究員 高田友

パネルディスカッション

議長 「文語の苑」副理事長 谷田貝常夫

中山尙夫、高田友

閉會の辭

「文語の苑」副理事長 加藤淳平

中山尙夫氏は、十返舎一九「東海道中膝栗毛」に就て、パワーポイントによる興味深き圖繪を参照しつつ、一九の諧謔精神、言葉の面白き使ひ方に關する啓發を爲し給ひけり。作品は寛政年間（一八〇〇年前後）に出版せられ、旅の風俗、往時の東海道往還の光景は言ふに及ばず、江戸の俗語の鱗背なる、武士町人の心意氣の高き、あるいは女人の氣風の潔きを描寫す。氏は、この名作を生き生きと解説せられ、さながら自ら旅す

るが如き思ひに誘ひたまふ。聴衆にして、これを繙かんと思ひ立ちたる方々必定、妙からざるべし。加之、紀行文の古代よりの歴史を、資料を提示しつつ仔細に亙りて語りたまふ。紀行文とは測り知れざる背景を持つもの哉と豈感嘆せられであるべけん。

その後、熊澤南水氏、「奥の細道」の冒頭部分を朗讀したまふ。凡そ紀行文にして、「奥の細道」の右に出づるものなしといへども、今回のシンポジウムにて他に取上げらるるなかりしは、人口に膾炙するの甚だしきに據りて、敢へて避けられたるならん。然則、南水氏ここに、女性の柔らかき美聲にて、原文を朗々と音讀したまふ、改めて、萬邦に誇るべき俳聖の作に觸るる喜びに浸りて已まず。「日月は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」と始まる名高き一節なれど、聞き取りやすき發音にて讀み給ひければ、芭蕉自らの聲を聞くかの如く文語の中に吸ひ込まれる思ひあり。

而して、高田友、「紀行文の歴史と系譜」を講演す。江戸時代を主題として、著名なる紀行文數點を紹介し、原文の解釋に及びたり。就中、通常の紀行文獻には擧げられざる徳川光圀の「甲寅紀行」もの珍しく、荒唐無稽なる「水戸黃門漫遊記」も滿更嘘偽りにはあるざるかと首肯せられたり。高田の曰く、菅江眞澄描く蝦夷地（松前藩）、下北（南部藩）、弘前（津輕藩）、秋田（佐竹藩）の人々の生活描寫の精密なる、感ずる所ありとぞ。

最後に、パネルディスプレイあり。谷田貝常夫副理事長、紀行文を總括し、その意義および日本文學の中に占むる位置を評價す。簡潔かつ行き届きたる概観にして、何ゆゑに芭蕉、宣長を始め、古今泰斗のかくも紀行文に傾倒したるかと言はれたり。中山氏補足せられ、高田また愚見を述べ。三人の會話の和やかなる雰囲気によりて、講演會、有終の美を飾りたりとこそは覺ゆれ。

今回は、愛甲次郎理事長支障ありて出席する能はず、遺憾此上なかりしかど、誌面を藉りて、御出席者各位および會員・讀者の諸氏に御挨拶とお詫びを申し上げたしとの傳言あり。

愛甲理事長に代りて、加藤淳平副理事長閉會の辭を述べ、無事に第五回シンポジウムを終ふるに至る。

第四回は「文語詩」、第五回は「紀行文」と、我らがシンポジウムも次第に軌道に乗りつつあるにあらざや。今後更なる發展あるべく、いづれもいづれも御力添への段、庶幾ひ奉る。